

ディレクター日誌（活動・子ども達の様子）

期 日：令和元年7月26日(金)～8月3日(土)【8泊9日】

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家及び周辺の山域（山口市阿東）

参加者：県内の小学5・6年生（男子16名、女子16名）

1日目「開会式・ダッフルシャッフル・バックパッキング」

期 日：令和元年7月26日（金）

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家～方丈原

令和元年度のチャレンジプログラムのはじまりである。参加者たちは、期待と不安の入り交じった表情で、十種ヶ峰青少年自然の家体育館に集まってきた。事前説明会で出会って以来の仲間たちとともに、ここから9日間の「心の冒険」がスタートするのだ。

開会式では、ディレクターから参加者たちに次のような言葉を投げかけた。

「キュウリを植えればキュウリと別のものが収穫できると思うな

人は自分の植えたものを収穫するのである」

子ども達は、何を求めてこのキャンプに来たのだろうか。何か一つでも「こうありたい」という目標をもって、9日間を過ごして欲しい。一つでも多くのものを収穫して帰って欲しい。そんな願いを込めて、子ども達の中に種をまく。9日後、子ども達はいったいどんなものを収穫して帰るのだろうか。

開会式後、早速ダッフルシャッフル（荷物の準備）にとりかかる。9日間、子ども達は基本的に「衣・食・住」全ての道具をみんなで分けて持ち歩くことになる。シュラフ（寝袋）や着替えなどの個人装備に加えて、テントやポリタンクなどの共同装備も多数ある。初めて聞く言葉や初めて目にする道具に戸惑いながらも、見よう見まねでバックパッキングを進めていく。まだお互いにぎこちなさが残るが、インストラクターがうまくつなぎ役と



なって活動を進めていく。準備ができた班から今日のテン場（宿泊地）へ出発していく。重たい荷物を持っての初めての山歩き。初日、初めて出会う仲間、重たい荷物、暑さ、たくさんのが子ども達の足取りを重くしていた。インストラクターは歩き方や水分補給の仕方、休憩の取り方や注意箇所の伝達方法を丁寧に教えながら、なんとか本日のテン場である方丈原へ到着した。テン場に到着してからはテント設営の仕方やトイレトレーニングをする。電気がない山の中では、少しでも明るいうちに行けることを済ませなくてはならない。今夜のメニューはマカロニシチュー。慣れない包丁やガスストーブを使って、自分たちの力で夕食を作ることができた。おいしい料理に元気をもらったようだ。

夕食後のミーティングでは1日の活動を振り返りつつ、9日間を通しての個人やグループの目標について話した。中には、「帰りた」と呟く声も。様々な思いを抱きながら、初めてテントでの夜を過ごした。

2日目 「バックパッキング」

期 日：令和元年7月27日（土）

場 所：方丈原～神角神社奥

2日目の始まり。夜明けとともに起き、日の出とともに出発して、明るいうちにテン場について食事をすませるとというのが山での掟である。そのため普段の生活より起床時間は早い。慣れないテント泊ということもあり、朝の動きはまだゆっくりしている。インストラクターに教わりながらテントやタープを撤収し、出発に向けて荷造りを進めていく。いざ出発というところで、また動きが止まる。無くし物が発覚したのだ。子ども達はこの日以降も、時間の大切さ、物の大切さについて考えることになる。

午前9時には全班がテン場を出発し、今日のテン場「神角神社奥」を目指す。本格的な山歩きのスタートだ。傾斜はさほどないものの、まだまだ慣れない山歩き。足に絡まる草木や暑さに体力が奪われる。危険箇所を見つけると呼びかけたり、歌を歌ったりしながら、楽しい山歩きを目指す。

山の中での生活にアクシデントはつきものだ。長い下り坂を下りたところに大きな倒木があったのだ。数日前の大雨の影響だろうか。大木が子ども達の行く手を阻んでいた。隙間をくぐれそうにも見えるが、大きなザックを背負っている子ども達にとって、この倒木を乗り越えることはそう簡単なことではない。どうやって越えれば良いか、インストラクターを中心に相談し、安全を確保しながらなんとか乗り越えた。恐怖心から涙を見せる子もいた。この予定外の体験が子ども達にとって大きな意味をもつことになった。どうやって乗り越えれば良いか知恵を出す者、恐怖で足が進まない仲間にそっと手を差し出す者、前から後ろから頑張る仲間に声をかける者。「仲間」とはなんだろう、「協力」とはどんなことを言うのだろうと、一人ひとりが考え始めるきっかけになった。



テン場につくと、前日と同じようにテント・タープを設営し、夕食作りにとりかかる。昨日と同じ活動とはいえ、場所や環境が変われば設営の仕方も変わってくる。トレーニングフェーズ（訓練期）として、インストラクターは丁寧に山での生活の仕方を伝授していく。暑さからか不調を訴え横になる子もいた。仲間のことを心配しつつ、残りのメンバーで活動を進めていく。夕食の頃には、全員がそろっておいしく食事をとることができた。



ミーティングでは、山歩きの仕方が話題にあがった。元気に歌を歌ったり声をかけたりする者もいれば、ついていくのに必死で黙って歩く者もいた。「みんなでやっているのに歌ってない人がいるのはいや」「本当はちょっと速いなと思ってた」1日の行程を振り返り具体的な場面を取り上げながら、インストラクターは子ども達それぞれの思いを拾っていく。助け合いってなに？8人みんなで行くにはどうしたらいいの？日常の世界から離れた山の中で、教科書通りのきれいな言葉は役に立たない。目標を立て今日の歩みを明日につなげる。それぞれの思いを胸に、眠りについた。

3日目 「トレーニング」

期 日：令和元年7月28日（日）

場 所：神角神社奥～上宇津根

3日目、分岐点で方向を確認し、地形（尾根・谷・鞍部）や植生（針葉樹・広葉樹）を見ながら進むのに絶好のトレーニングコースだ。子ども達だけのファイナルツアーに向けて最も長い行程でもある。だからこそ、できるだけ早くテン場を出発し、涼しいうちに歩みを進めたい。しかし、どの班もなかなか出発できない。あっという間に出発予定時刻を1時間以上過ぎてしまった。無くし物を探したり、パッキングをしたりするのに時間がかかっていたのだ。インストラクターは必要な指示を出しながらそっと手を貸す。時間への焦りを感じつつ、もう一度先を見通した時間の使い方、パッキングの仕方を伝授していく。トレーニングフェーズでしっかりと身につけていないことは、この先のフェーズでも子ども達を苦しめることになるからだ。

午前8時過ぎにはじめの班が出発、最後の班は9時過ぎの出発となった。目の前に現れたのはいきなりの急斜面。「え？ここを登るの？」と、驚きを隠せない様子ながらも、どこか楽しそうな表情をしていた。3日目を迎え、少しずつグループの人間関係も打ち解けてきたのだろう。仲間への励ましや注意喚起の声が飛び交う。いいスタートだ。



急斜面を1時間近く登ると、林道にでる。ここからは県境（尾根）を通る。山の中ではたくさんのおかげで木陰ができ、時折吹く風が心地よい。風を感じるたびに「わぁ・・・」と声上がる。途中には、徳佐の町を望める絶好のビューポイントもあった。冒険の記念に「ハイ！チーズ！！」



17時前、ようやくテン場に到着した。朝元気に出発した子ども達も、休憩を含めて約8時間歩き続け、さすがに疲れ切っていた。小休憩をはさんで早速テント・タープの設営に取りかかる。この日は2回目の食糧配給。「荷物が増える」よりも、「おいしそう！早く食べたい！」と笑みがこぼれる。やはりおいしい食事は元気の源だ。1回目よりも手際よく食材を分け、温かくおいしい夕

食をいただいた。

ミーティングでは、「今日のリベンジがしたい！！」という声があった。子ども達の中で、自分たちの決めた目標（朝の出発時刻）を守れていないということに対して、課題意識が生まれてきたようだ。明日の出発が楽しみである。

4日目 「バックパッキング」

期 日：令和元年7月29日（月）

場 所：上宇津根～福谷

4日目、プログラム全体で考えると「エキスペディションフェーズ（遠征旅行期）」に入る。インストラクターからの直接的な指示や手助けは少しずつ減り、行動の決定の多くが参加者に任せられる。この日のコースはこれまでに比べると比較的短い。そして何よりも、テン場である福谷ではこのキャンプが始まって初めてのディップ（川での水浴び）ができる。「早く着いて早くディップをしよう！」と、わくわくしながら今日の目的地を目指す。そんな中、出発前にミーティングの時間を設けることを選んだ班もある。話し合っただけでは決めたはずのことができない。話し合いで言葉にすることと、実際にそれを行動に移すこととの間には大きな壁がある。自分の言葉に責任をもつこと、みんなで決めたことは全力で守ろうとしなければ意味がないこと、でもそれは思った以上に難しいこと。子ども達同士の思い、インストラクターの願いを伝え合った。



昼過ぎにはテン場に到着。昼食をとって早速待ちに待ったディップタイムだ。水着に着替えディップポイントに向かう。初めは少し照れくさそうにしていた子ども達も、久しぶりに汗を流せるということで大はしゃぎ。山の水は痛いくらいに冷たい。しかし、連日の暑さで火照った体と疲れ切った足にはこの冷たさがたまらない。頭までしっかりと浸かって疲れを癒やし、汗を流した。

5日目「ロッククライミング」

期 日：令和元年7月30日（火）

場 所：福谷～ロックサイト～福谷

5日目。ロックサイトへ向けて、テン場を出発する。今夜はテン場の移動がないため、テントを片付ける必要がない。また、日中岩場（ロックサイト）が暑くなると活動が難しいため、いつもより早めのスタートだ。ロックサイトまでの道のりは、福谷の裏山を越えていく。短いコースではあるが、今までと違い道らしき道がない。苦戦しながらやっとの思いでロックサイトに到着した。



ロックサイトに着くと、まずはビレイスクールを受けた。体を支えるハーネスの付け方、岩場での体勢の取り方、命綱の扱い方、安全のために一つ一つ丁寧にレクチャーを受ける。ロッククライミングは、岩場を登るチャレンジャーだけの力では目標を達成できない。チャレンジャーにつながる命綱を握るビレイヤー、綱が絡まないように送り出す者、次の手をどこに伸ばせばいいかアドバイスをする者、恐怖心を拭おうと励ましの声をかける者。岩場を登るのは一人だが、一人のチャレンジャーをみんなが支える。班の中での役割分担やこれまで築き上げてきたチームワークが試される。



各班、チャレンジャーとビレイヤーがコンビを組んで、チャレンジがスタート。岩場の頂点を目指して勢いよく登り始める。しかし、突如動きが止まる。手足をかけられる場所が見つからない。思うように動けない。下から見える様子と実際の岩場とは意外なほどに違う。そこに高さと不安定さへの恐怖心が加わって、多くのチャレンジャーは歯がゆさを感じる。初めはただ見守ることしかできなかった子ども達から、少しずつ声が届き始める。「もうちょっと右に手を伸ばしてみてください！」「大丈夫！！支えてるよ！！」「そうだよね。結構怖いんだよね。」同じ体験をしたからこそその励ましやアドバイスの言葉が、チャレンジャーを支えていた。

午後3時過ぎ。突然の雷雨のため活動を停止。この時点で2つの班は全員のチャレンジを終えていた。しかし、残りの2班はまだチャレンジできていない参加者が残っていた。岩場から離れ、雨雲の動きを見ながらしばらく待機。天候の回復が見込めないため、安全面を考慮してこの日のチャレンジは断念することとなった。「チャレンジしたかった」「写真を撮って、頑張っている姿を家族にも見て欲しかった」涙を流す参加者を仲間が励ます。参加者たちの強い思いに応えるためにも、明日はなんとしてもチャレンジできるよう願いたい。

6日目 「ソロ」

期 日：令和元年7月31日（水）

場 所：福谷～福谷奥

6日目。前日のロッククライミングができなかった2班は朝一番にロックサイトへ移動し、無事に全員のチャレンジを終えることができた。その後、福谷奥に移動して、すぐに「ソロ」に入る。これまでの「動」の活動とは変わって「静」の活動である。グループの仲間と離れ、日中一人の時間を過ごす。もちろん、歩き回ったりしゃべったりすることは許されない。インストラクターから必要な指示を受けて、一人一人が指定された場所に入る。これまでの経験を生かし、シートを広げたりソロ用のツェルト（簡易タープ）を張ったりと、それぞれが自分の過ごしやすい環境を作る。「ソロ」の間、与えられた時間をどう過ごすかは参加者自身に任される。横になって疲れをとるもよし、日記を書いたりリーディング集（詩集）を読んだりするのもよし、荷物の整理をするのもよし。初めて仲間と出会ってから5日間、朝起きてから夜寝るまでずっと8人で一緒に過ごしてきた。この日だけは、一人になって心と体の疲れを癒す。



これまでの自分を振り返り、自分自身としっかり向き合っていて欲しい。一緒に過ごしてきた仲間のこと、家でみんなのチャレンジを応援してくれている家族のことを考えてみて欲しい。「ソロ」に入る前、インストラクターからそんな投げかけをした。非日常で不便な環境にいるからこそ、様々なことに対する感謝の気持ちが自然と生まれてくる。蛇口をひねれば水が出てくること、温かいご飯を食べられること、時には厳しく時には優しく支えてくれる家族がいること。家族からの手紙を読んで思わず涙してしまった子もいた。

子ども達のソロ中、ちょっとした出会いがあった。福谷の地をキャンプに使うことを快く了承してくれた地主家族のみなさんに出会ったのだ。これまでの子ども達の頑張りを聞き、心から応援してくださった。そして、頑張る子ども達へとたくさんの野菜や大きなスイカをいただいた。野菜は子ども達の夕食へ、スイカはしっかりと冷やしてラストラン後に振る舞うことにした。地元住民の方の理解と協力も、このプログラムの大きな支えとなっている。

夕方、ソロ明けの時間を迎えた。各班インストラクターの演出で、再び8人で食卓を囲む。「ソロの間何してた？」「ちょっと不安だったよね」「ぐっすり寝てたよ」子ども達は、堰を切ったように話し始めた。何気ない会話をしながら、今夜も温かいご飯をいただく。仲間と離れて一人の時間を過ごしたことで、仲間の存在の大きさを改めて実感しているようだった。話は自然と明日のファイナルツアーの話題になる。明日のファイナルツアーに期待したい。

7日目「ファイナルツアー」

期 日：令和元年8月1日（木）

場 所：福谷奥～十種ヶ峰山頂～方丈原

（女子1班は十種ヶ峰青少年自然の家へ）

7日目、ファイナルツアーである。コースの締めくくりとなる1日は順調に始まった。今日までの6日間、少しずつでも確実に成長し続けてきた子ども達。インストラクターの指示を待たずして自然と体が動くようになっていた。テントを片付けパッキングをする子ども達の姿には、どこか余裕すら感じる。



7時過ぎには全班がテン場を出発した。ファイナルのコースは、福谷奥の堰堤脇から山に入り、谷に沿って作業小屋を目指す。作業小屋からしばらくは、3日目のトレーニングで歩いた道と重なるため、これまでの歩みを振り返るのにも絶好のコースだ。スタートしてすぐ、ちょっとしたアクシデントに見舞われた。一昨日の雨の影響からか、溜め池の水面と山道へとつながる階段との境目が分からないほどに、池の水かさが増していたのだ。水たまりの中を慎重に歩く。しばらくは池をすぐ左下に見ながらの細い道だ。笹の上で足を滑らせ、間一髪インストラクターに助け出された子もいた。ハラハラドキドキのスタートだ。それでも子ども達の明るい声が響いていた。



作業小屋までは、順調な歩みを続けていた子ども達だが、さすがに疲れも見え始めた。ここからは道のはっきりした林道が続く。しかし、見通しが良いというのは時として残酷なもので、歩いても歩いてもなかなかつかない、だらだらとした林道が続くのだ。体力的にも精神的にも踏ん張りどころだ。エネルギーチャージをして、もう一度みんなでルートを確認する。

作業小屋を出発した後、確実に歩くペースが落ちていた。当初設定していたタイムリミットも過ぎてしまった。しかし幸い天気が見方をしてくれた。もうしばらく雷雨の心配もなさそうだということで、子ども達のチャレンジを見守った。

午後1時30分、最初の班が山頂到着。午後3時過ぎには全班がピークアタックに成功した。眼下には徳佐の町が広がる。インストラクターと一緒に、これまで歩いてきたルートを振り返る子ども達の表情は、どこか誇らしげだった。



8日目「クリーンナップ」

期 日：令和元年8月2日（金）

場 所：方丈原～十種ヶ峰青少年自然の家

8日目。今日は自然の家のキャンプ場へ戻ってクリーンナップをする日となる。この旅最後のテント泊を終え、この旅最後のパッキングをしてキャンプ場へ戻ってきた。

キャンプ場ではお世話になった装備のクリーンナップを行う。テントやザックについた泥などの汚れを落とす。これまで多くの参加者たちが使用してきた装備であり、来年度以降も子ども達が使用する装備である。再びきれいにしておいて次の人へつないでいく。ザックやスパッツに染み付いた臭いや泥汚れが8日間の大冒険を思い起こさせる。

午後には待ちに待った入浴の時間。久しぶりの入浴に喜びが抑えられない。心も体もさっぱりして、再びクリーンナップに奮闘した。と、ここでまたもやプチアクシデント。ずっと味方をしてきていた天気が崩れ、まさかの雷雨。キャンプ場に広げて乾かしていた物を大急ぎで回収し、体育館へと移動した。最後の最後まで記憶に残るプログラムとなった。

8人での最後の夕食。もう夕食の準備はお手の物という様子で着々と準備を進めていく。今夜のメニューはちらし寿司。そして、ラストナイトミーティングへ。ここまでやってこられたことを振り返り、お互いへの感謝の気持ちを伝えあった。また、最後まで諦めずに歩みを止めなかった自分の頑張りに気づき、次から次へと思いが溢れ出していた。このメンバーで過ごす残りわずかな時間を噛みしめるように、温かい雰囲気にもまれて夜は更けていった。



9日目「個人ラン・閉会式」

期 日：令和元年8月3日（土）
場 所：十種ヶ峰青少年自然の家

最終日、8人の仲間ともいよいよ別れの時が近づいている。仲間と共に過ごす一つの時間を大切に噛みしめながら、前日のクリーンナップの続きに取りかかる。

同時にインストラクターは保護者との懇談を行い、9日間の出来事を保護者へと伝える。子ども達の頑張り、成長、葛藤など、ずっと一緒に過ごしてきたからこそ見えた様々な姿が伝えられた。学校や家にいたときには想像もできなかった子ども達の様子を伝えられた保護者は驚きや感動を覚えていたようである。



クリーンナップを終えて、インストラクターが保護者との懇談を終えると、いよいよコースのラスト、個人ランである。9日間を共に過ごし、最高の仲間をつくってきた子ども達。しかし、ずっと一緒にいられるわけではない。閉会式を終えると、それぞれがそれぞれの生活に帰っていくことになる。個人ランでは、一人一人が自分の目標を立て、個人のチャレンジをする。仲間と共に成長してきた自分が、一人でどこまで頑張ることができるのかを試すチャンスであり、これから日常生活へ帰って自分の力で頑張っていこうというスタートの儀式でもある。だから、これまでの山歩きのように仲間にペースを合わせるということはない。苦しくなっても、手を引いてくれる仲間はいない。でも、どこかで同じように頑張っている仲間がいる。そう思うだけでどこからか力が湧いてくるのはなぜだろう。一人、また一人とゴールを迎える。先にゴールした仲間が自然と仲間のゴールを待つ。全員が全力のチャレンジをし、無事にゴールした。ゴールでは、福谷でいただいた大きなスイカが振る舞われた。見えないところで応援してくれている人がいることを改めて感じた。

閉会式では、「このキャンプで収穫できたと思うことは」と尋ねた。「友達」「本音を伝えること」「物や時間の大切さ」などそれぞれが思いを語ってくれた。何よりも、「これからは...」と言葉をつなげて話してくれたことが本当に嬉しかった。今日は終わりの日ではない。今日からが新しいスタートだ。この9日間で収穫したものをこれからしっかりと育てて欲しい。人の成長は自然の世界とよく似ている。植物は水をやらなくては育たない。人間も同じだと思う。今回の大冒険で見つけた自分の中の輝きをどうか大切に育てて欲しい。いつかきれいな花を咲かせるその日まで。素敵な思い出をありがとう。新しい船出だね。「いってらっしゃい!!」

